

## 言葉の豊富な子供ほどどんどん伸びる

学校の給食の献立表に「むしばん」とかなで書かれていたため、「虫の入っているパンが出てくるのかと心配しちゃったよ」と嘆いた生徒がいたそうです。これは、その子供が「むし」といえば「虫」だけで、「蒸し」という言葉があるのに気づかなかったことから起こったことでしょう。

このように、私たちは、言葉(専門的には「<sup>ないげんご</sup>内言語」といいます)でものごとを考え、認識しています。ですから、言葉の豊かな子供は、思考の幅が広く正確になります。

このとき、言葉を頭に蓄え、その意味を理解し、ものごとの概念を正しく認識するには、日本語では何といても漢字の力を高めることがカギを握ります。

たとえば「しかく」という言葉を想像してください。そのときどきに応じて、この言葉を正しく認識するには、「四角」「視覚」「資格」「死角」「刺客」といった豊かな漢字力がベースになればなりません。

ところで、岸本裕史氏(学カコンサルタント)が、小学生を対象に、知っている言葉の数と成績の関係を調べた、非常に興味深いデータ

があります。

それによれば、小学一年生では、五段階評価の成績の上位([5])、中上位([4])、中位([3])、中下位([2])、下位([1])の順に、語彙数が7000、4000、3000、2000、1000となっていました。何と、上位と下位では三倍以上の差があったのです。

一方、小学六年生を調べてみたところ、成績の順に、語彙数が37000、20000、16000、11000、8000でした。やはり、上位と下位では三倍以上の差が認められました。

この結果、「知っている言葉の数の多い子供ほど、成績がよい」という傾向が明らかにされたのです。

さらに、「読書量の多い子供ほど、成績がよい」というデータも出ています。これは、六学年全体を対象に、月間読書冊数を調べたもので、成績が上位の子供では38~80冊、中上位では10~20冊、中位では3~5冊、中下位では1~2冊、下位では0冊でした。

もちろん、学校の成績だけで子供の能力を測ることはできませんが、岸本氏の調査は、少なくとも成績のよい子供ほど、知っている言葉の数が多く、読書量も多いことをはっきり表しています。

日本語は、その特徴として、内容の深い言葉の多くが漢字を基本

にして作られた「漢語」です。ですから、漢字に強くなるほど内容豊かな言葉をたくさん蓄えることができます。

そうすれば読む力がついて、おのずと読書の楽しさに目覚め、読書量も増えますので、国語力が高められます。その国語力が他の教科の理解力を高めますので、全体的に学力が向上してくることはいうまでもありません。

ところが、小学校に入った子供たちが受ける国語教育、とりわけ漢字教育には大きな問題があります。

小学校一年生が学ぶべき学年別配当漢字は、わずか八十字です(小学校六年間では合計で 1006 字)。この数字に限定されているのは、読める漢字は同時に書けないといけないという考え方(つまり「読み書き同時学習」)で国語を教えているためです。しかも、この「読み書き同時学習」で子供に教えようとする、「交ぜ書き」という極めて効率の悪い学習を余儀なくされます。

たとえば、はじめにでも触れましたが、「予防注射」という漢字を学習する場合、小学校一年生と二年生の配当漢字表には、四つの漢字はどれも含まれていないために、「よぼうちゅうしゃ」とすべてひらがなで習うことになります。

三年生になると、「予」と「注」という漢字は習うので、「よぼう注しゃ」と交ぜ書きで表記することになります。

五年生になると「防」という漢字を習うので「予防注しゃ」となり、六年生になって射が出てきてやっと「予防注射」とすべてを漢字で表記できることになります。

こうして、「予防注射」と表記して読みと書きができるまでに何回も習い直すわけですから、これを能率が悪いと言わずして何と言うでしょう。それに子供だって混乱するばかりですし、だいたい途中で飽きてしまうでしょう。

これを解決するには、読みと書きを別にして、最初から「予防注射」として表記し、一年生から読ませるようにするだけでいいのです。こうすれば、どんなに簡単にこの言葉を覚えられるか、容易に想像がつくでしょう。

実は、こうした「交ぜ書き」が教育現場で用いられてきたのは、幼い子供ほど漢字よりひらがなのほうが覚えやすいだろうという誤った考え方があるからです。くわしくは、のちほど述べますが、事実とはまったく逆なのです。零歳や一歳の子供でさえ漢字ならば絵を見るように喜んで覚えてしまうのです。